



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 老後を幸福に生きる

日本人の平均寿命は平成22年度の簡易生命表によると、男性が79.64歳、女性が86.39歳で、世界一の長寿国となっています。平均寿命とはゼロ歳の人々の平均余命のことであり、67歳になった私の平均余命は65歳が18.86歳、70歳が15.08歳ですから、おおよそ15年くらいなものなのです。つまり後16年経ったら、私は完全にあの世へ行かなくてはならないのです。「昨日まで人のことかと思いに、俺が死ぬのかこれはたまらん」という川柳が、いよいよ現実味を帯びてきました。

人生80年といわれる高齢化時代がやって来ましたが、私自身一日の殆んどを労働に費やしていた窮屈な現役時代に比べ、全ての時間を自分で自由に管理でき

る日々が待っているだろうと、退職後の老後をバラ色がかつて想像し、ある意味あれもやりたいたいと楽しみにしていました。

しかしいざその域に達してみると、時間は十分あるものの何をしたいか分からず、収入の殆んどを減り続ける年金に依存して暮らしている現実からすれば、自由がゆえに不自由であることに、今頃になって気がついているのです。知らず知らずの内無意味に過ぎた退職後の8年間の思えば、残された平均余命の15年余をこんな感じで過ごすのかと思うと、「俺の人生はこんなものだったのか」と失望感さえ漂うのです。

65歳以上の人を高齢者と呼んでいます。「老後」という漢字を読み解くと「老いた後」とも訳せます。じゃあ70歳近くでも元気な人は「老いる前」の「老前」なのでしょう。いずれにしても最近、お年寄りの養殖場ではないかと思われるほど、お年寄りが目に付くようになりました。勿論かく言う私も生き生き輝いて生



きている、元気なお年寄りの一人ですが、中には人に交われなかったり地域活動に参加しない、孤独な人たちも沢山いるのです。

私たちの町は大小の河川に沿って山間や谷川に集落が点在していますが、先日その一つの20戸ほどの小さな集落へ講演を頼まれて出かけました。講演が終わって話し合いになると、ある85歳のおじさんが手を挙げ、「この集落には子どもと名のつく動物が一匹もおらん」といいました。言葉をつなぐように「先日わしの組内で葬式があったが、いざ出棺となつて組内で一番若い男のわしが棺桶の前棒を担いだが、相方がおらず親類の人に手伝ってもらつて事なきを得た。わしが死んだらわしの棺桶は誰が担いでくれるのか」としみじみ話されました。「子どもがおらん」ということはこの15年、この集落では夜の営みが一切行なわれなかった(笑い)。「死んだ後を心配せんでも、あんたが死んだら病院から葬祭センター、焼き場へ直行だから。(大笑い)」などと、戯言で多いに盛り上がりましたが、年寄りの悩みの種は尽きぬようです。

そんな中でもう一花咲かせようと、頑張っているお年寄りも目立つようになつてきました。ご存知徳島県上勝町のお年寄りたちは、葉っぱをお金にするビジネスを考えました。葉っぱをお金にするのは狐や狸の世界の話だと思いきや、どうしてどうして80歳を越えたおじいさんやおばあさんが、年収1千万円以上を稼いでいるのです。私は学校でパソコンを習わなかった世代ですが、上勝町では時代遅れの象徴のようにいわれているお年寄りがパソコンを習い、パソコンを武器に活躍している姿を見ると、進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンが言っている「強い者や賢い者が生き残るのではなく、変化に順応した者が生き残る」ことを強く感じるのです。

また四万十川の中流域西土佐の山間地では、増え続ける竹を切って自分たちの作った炭窯で長年の間に培った農作業技術で竹炭を焼き、放っておくと村を覆いつくしかねない竹を活用する活動を始めています。山深い山間地では民家と民家の間が離れていて、何かと不便で安否確認もままなりません。活動は山村のコミュニティケーションの場となり、竹炭や竹酢が環境に優しいことに目をつけ、うどんに竹炭を練り込んだ特産品を開発したり、農産に頼らない農業へと第一歩を踏

み出しているようです。

今田舎でも都会でも農産物直販所が大流行で、あれほど系統販売を推進して組織を大事にしてきた農協が、財力にものをいわせて大型の農産物直販所を営んでいます。すし、ホームセンターまでもが農水産物直販所を造り、ついで買いのコバンザメ商法に走っているのです。これら直販所の商品棚には顔の見える商売をしようと、農業生産者の名前が顔写真入りで貼られています。その殆どは65歳を過ぎた高齢者なのです。自分が作った農林水産物を軽四トラックに積んで、複数の直販所を掛け持ちしている人は珍しくないようです。お年寄りの多くは社会保障などと比べると決して多いとはいえない国民年金で暮らしています。年々細る年金を嘆きながら生きる人も沢山います。農産物を出品してコツコツ日銭を稼いだ売り上げ金額を合わせると、使いきれないほど儲けて笑いが止まらない人もいます。地産地消を売り物にして人が来ないと、他力本願で嘆きながら商売をしている人たちは、見習うことが多いうです。

日本は豊かさをGNP(国民総生産)という経済の物差しで計ってきました。ところが先日来日したブータンのジグミ・シンゲ・ワンチュク国王からGNH(国民

総幸福量)という、物質的・金銭的には測れない精神的な豊かさの必要性を聞きました。GNPは目に見える価値ですが、GNHは目に見えない価値なのです。GNPは決して高くないブータンの国民は、「私は幸福だ」と世界で一番感じているというのですから驚きです。

私たちはせっかくこの世に生きているのですから、せめて老後くらいは命の尊さや時間や幸福をもっと実感するよう、豊かな心で暮らしたいものです。そうすれば次の世代の人たちが、「あのような人生を送りたい」と希望や勇気を持って、見習いながら生きてくれるのではないのでしょうか。頑張れ高齢者。頑張れお年寄り。頑張れお前。

GNP 目指したけれど 本当は  
GNHが 大事なんです  
年寄りに なって初めて 年寄りの  
気持ち分かる 後の祭りか  
年寄りの 武器にするため パソコンを  
習わせ活用 ヒットがヒント  
直販所 二軒三軒 梯子する  
袋百円 積れば山に  
(若松進一笑売啖呵より)